支部だより

中国気象学会代表団を迎えて
—中部支部での交流—

岩坂泰信*

10月24日の夕方，章基嘉団長をはじめ総勢5名の中国気象学会代表団が名古屋入りした．旅のつかれも見せず，代表団は翌日早々から活発な学術交流をされ，10月26日には名古屋をたち大阪に向かわれた．短い時間ではあったが実り多い研究交流であった．中部支部の活動報告という意味で，気象学会代表団との交流の様子をここに記してみたい．

代表団は，気象の研究（教育も一部入っていたかも知れぬ）の様子を知る目的で名古屋大学水圏科学研究所を視察された．主に各種レーダ，人工衛星受信装置，電子顕微鏡，及び質量分析器を見学された．マイクロ波のレーダは，すべての人にとってなじみ深いものであったと見えて装置そのものに関する質問は少なかったが，それらのすべてが移動観測用に作られている点に大きな興味をもっておられた．またデータ処理関係にマイクロコンピュータが何台も使用されているのも興味深く見ておられた．レーザレーダでは，成層圏エアロゾルよりは，黄砂の観測例がはるかに人気（？）があったが，「中国では，黄砂時は，風は強く物は見えず大変な状況になって，とても観測どころではありませんよ」というコメントには何とも返答に窮した．エアロゾルの電顕写真も，興味深かげであった．質量分析器の使用状況を視察された時は，質問が一気に専門的になった．「一体，南極からの氷や雪の試料はどのようにして持ち帰るのですか？」という質問に，「船の冷凍庫に入れて運びます」という答えがあった．通常ならば，ここで暑い赤道を越えて持ってくるのは大変という話しに変わるのだが，この時つづけて「囲りの空気の影響はどうするのですか？」と俄然質問が難しくなってきた．その後しばらくやりとりが続いたが，その時どうしてこんな難しい質問をされるのか聞いてみたら，「団長の章基嘉さんが中国南極観測隊の隊長であった」とのこと．一同これで納得したと同時に，中国が地球規模の大気汚染等の調査に強い関心をっていることもよくわかった．

施設の見学の後，水圏科学研究所で次の2つの講演が行われた．

章基嘉：An introduction to Chinese Meteorological Service.

相国祥：A medium-scale study of the mei-yu front heavy rain.

2つめの講演では，現在，水圏科学研究所で勉強している留学生の劉勝国さんが級友の拍手をうけながら通訳していたのは，ほほえましい光景であった．

午後は，樋口敬二水圏科学研究所長の案内で，名古屋港にある南極博物館“ふじ”に向かった．章基嘉さんが南極経験者とあって大いに話しがはずんだ．展示室では，隊員装備品や気象観測用ロケット等こまかい物まで見ておられたのには感心した．操舵室では，章団長から通訳の王さんまで，観測隊長用の椅子に座って雰囲気を味わっておられたのは愉快であった．

夕方からの懇親会には，伍倍明さん（劉さんと同様，中国からの留学生で水圏科学研究所で勉強されている）が通訳として活躍し，中国気象局の通訳の王さんを大いに助けていた．あちこちで，代表団の人を囲んで人の輪が出き，いろいろな話題に花がさいた．中国大陸の存在が地球大気に与える影響は巨大であることは万人が知るところである．しかし，ここ数年急速に日本と中国の間で交流が進んできたが，我々が，中国の気象学を知り，さらに中国大陸での気象を理解するにはほど遠いものである．代表団の名古屋での活躍は，今後の両国の交流が益々さかんになり，そのことが気象学の進展に大きな寄与となることを確信させるものであった．ひとつだけ残念であったのは，日本側で中国語を解する人が居なかったことである．歯がゆく思ったのは，筆者のみではあるまい．

* Yasunobu Iwasaka，名古屋大学水圏科学研究所．